

富士はおまけ（ラヂオ・ドラマ）

岸田國士

青空文庫

富士を遠景に、霞のなかに浮ぶ峠の古風な掛茶屋。軒先に山桜の一株が綻び始めてゐます。

茶屋の主、東定臣が、ネルのシャツにコオルテンの半ズボンを穿き、店の前の道を鍬で平ら^なしてゐます。時々、腰を伸ばし、空を見上げるのですが、やがて、

定臣　ああ、やつとこの峠にも春が来た。それにしても昨日までの冬はどこへ行つた？

満洲か？　西比利亜か？　さうだ、ここんところ、東北の饑饉騒ぎで、兵隊さんに送る慰問袋の方を、すっかり怠けてゐた。人間の頭つていふもんは、さう一どきに何もかも考へつくもんじゃない。新聞が気をきかして、絶えずあれこれと注意してくればよささうなもんを、これがまた、わいわい云ふ時には云ふが、云はん時にはうんともすんとも云はんので困る。非常時だ。なるほど、それや百も承知だが、いったい、われわれの議会は何をしとるんだ？　年末だ年始だと云つて、この際休むといふ手はない。一週間地球をひと週りでできる時代ぢやないか！　世界の大勢は、飛行機ほどのスピードで移りはせんといふのか？　そんなら、青森の娘達が、一夜にして娼婦となるのを知らん

のか？ ルウズベルト大統領が、元日の朝、ストウヴの前で宣戦布告の文案を作つてゐたらどうする？ いやいや、その方は、われらの將軍、われらの提督に委せておかう。提督といへば、スタンドレエといふのは、あれや、何者ぢや。間口さへ広ければ大きな番頭面ができるといふ肚に違ひない。活動に出て来る南極探検みたいな帽子を冠りやがつて、五五三の比率か？ 笑はせやがらあ。それにしても、村の税金が集らんといふ話はこいつ、聞き捨てにならん。小学校の先生には、まあ、月給が渡らんぐらゐ辛棒してもらふとして、それで国家の經濟がどうなるかといふことだ。いざ建艦競争となれば、めいめいの家の鍋釜を残らず掻き集めても事足るやうなもんだが、やはり、現金も必要だらう。日本銀行にいくら貯金があるか知らんが、失礼ながら、手元不如意とお察する。これといふのも、若いものが骨惜みをするからだ。いかに山国とはいへ、冬は遊ぶものと決めてゐるからだ。炭を焼く男がだんだん減つて行くといふぢやないか？ 一俵いくらにしかならんといふ考へがそもそも氣に入らん。枯木に花を咲かせよう、土を掘つて小判を出さう、これが当節の嘆かましい氣風だ。おれを見ろ、おれを……。雪に埋れた峠の茶屋で、二十年この方、手間を惜まず道普請だ。東西二十町の県道が、この通り、坦々剃刀の革砥のやうだといふのは、これみな、おれの奉公心からだ。

この時、娘の孝子が、谷間からバケツを提げて上つて来る。

孝子 おとつあん、もう、こら、こんなに芹が出てるわ。

定臣 芹も出るだらう。自然の恵みは有難いものだ。汁の身にするといい。それから、おつ母さんにちつと起きてみるやうに云へ。冬越しの頭痛なんていふのは名誉にならん。孝子 あたし、一番の乗合で、南さんへ行つて来ようかしら……。

定臣 南病院の薬なら、あれや、飲まん方がいい。アスピリンといふやつにきまつとる。実母散から取つたもので、元は同じだ。日本在来薬は、どうして、なかなか馬鹿にならないのだよ。近頃、博士連中でもそれに気がついて、こつそり使つてるのがあるといふ話だ。

孝子 序に、あたし、買ひ物があるの。

定臣 オオライさんに頼めばいいぢやないか。

孝子 冷やかされるから、いや。

定臣 夕方、役場へ行くから、そんな時買つて来てやる、なんだ？

孝子 レタア・ペエパア。

定臣 やれやれ、巻紙ぢや手紙の書けん人間をだれが作つたんだ。お民のお多福が洋服に靴をはいて、「出かけませう」つていふ代りに、「オオライ」と吐かしやがるんだから、これも時世と諦めるより仕方があるまい。ところで、腹が空いて来たのには弱つた。早く飯にしてくれ。

孝子 オオライ。

定臣 はは、飯に出かけませうか。

孝子が裏にはいると、定臣は、再び鍬を動かしはじめる。風呂敷包みを背負つた男が現はれる。

定臣 忠さんか、早いね。

忠 早いにもなんにも、昨夕ゆうべから歩き通しだ。

定臣 へえ、女房を貰ふと精が出るもんだね。

忠 女房のせいぢやないよ。非常時のせいだよ。こん中になにがはいつてると思ふ？

定臣 まさか爆弾ぢやあるまい。

忠 おとつつあん、桔梗ヶ原に工場の立つこたあ知つてゐるかい。

定臣 あ、そいつは知らない。なんの工場だい？

忠 あの辺の土から妙なものが取れるらしいんだ。ずっと以前、石を切り出してたころ、覚えてゐるかい？

定臣 三年たつたら、溶けちまつたつて石だらう。

忠 あの石が曲者らしいよ。うちの大將の地面があの続きなもんだから、いま、事務所へ掘つた土を見せに行くとところだ。当りや大きいよ。坪いくらつて、値が出てゐるんだからね。

定臣 その石をなんにするんだね。

忠 だれもよくは知らないんだが、なんでも、戦争の用意らしいんだ。火薬の材料ぢやないかつて、云ふものもあるんだがね。

定臣 そいぢや、やつぱり、わしの云つた通りだ。こいつは、爆弾だ。（風呂敷包みを叩く）

忠 混つちまふからよしてくれ。おまけに、職工募集が始まつてゐるんだぜ。日当六十銭

で、われもわれもさ。さうだらう、畑を掘ったつて、それだけのものは出て来やしない。

定臣 （腕を組んで考へ込む）

忠 大きな声ぢや云へないが、おれも名前だけ書き込んで来るつもりだ。作男で水つ洩を垂らしてよりや、気がきいてらあね。

定臣 なにを云ふんだ、忠さん。自分のことばかり考へてる時ぢやないよ。お前がゐなくなつたら、新庄さんとこの大根はだれが作る？ 大根が取れなくなつたら、新庄さんは税金をどうして納める？ 税金がはいらなくなつたら、国家はだれが養ふ？

忠 うちの大将、税金なんか、どうせ払つてやしないよ。

定臣 それが困るんだ。地主がさうだから村も立ち行かんし、お上も難儀をなさる。職工になり手はいくらだつてゐるよ。

忠 まあまあ、そこはおとつつあんの知つたこつちやない。渋茶でも入れなよ。

定臣 ほんとかね、それや……。工場が建つつてね。悦んでいいことか、悲しんでいいことか……

忠 おいおい、どつちかに早く決めて、茶を出しなよ。さつきから喉がひつつきさうなんだぜ。

定臣　裏へ行つて、水でも飲んで来なよ。お前なんかにはいちいち茶を出してゐられるかい。

忠　云つたな、おやぢ。青年団の忠助をいい加減にあしらふ氣だな？

定臣　そつちが青年団なら、こつちは訓練所の監督だ。愛国茶屋の主、東定臣をだれだと思つてやがる。

忠　（包みを背負つて起ち上り）訓練所の監督はいいが、娘の監督は大丈夫か。

その後ろ姿を見送りながら、定臣は、憤然とする。

定臣　（やがて）近頃はなんのかんのと、若いもんを煽てすぎる。祖国の運命は諸君の双肩にありなどと、県知事までが余計なお世辞を使ふもんだから、青年たちが生意氣になり、年寄りを年寄りとも思はんやうになる。国の乱れる兆だ。

奥から「お父つつあん、ご飯……」といふ娘の声。

定臣は、鍬を軒下に立てかけて、奥にはいる。

入れ代りに、孝子が店先に出て来て、箒でその辺を掃きなどする。遠くから、皺喰れた軍歌の声が聞える。娘は耳をそばだてる。やがて、一人の洋服を着た中年の男が現はれる。兵頭である。

孝子 あら、先生、どちらへ……。

兵頭 校長の代理で役場へ行くんだ。どうも生徒の出が悪くつて閉口だよ。昼の弁当をなんとかせにやならんといふわけさ。ほほう、ここでも桜が咲いたね。どうした、久しいこと、学校へ遊びに来んが……。

孝子 近いうち行かうと思つてたんですわ。矢代先生もお変わりありません？

兵頭 矢代君は、ほら、毎年凍傷に罹るのがいやだつて、去年の暮神奈川へ変つたよ。

いま、だから、臨時に、荒井に手伝つて貰つてる。君の組にゐた荒井だよ。

孝子 お金ちゃん、まあ……。 （奥に向ひ）お父つつあん、兵頭先生よ。

定臣 （奥から出て来て）早速ですが、先生、桔梗ヶ原へ工場が建つつていふのは本当ですか。

兵頭 さういふ話ですね。それがどうしたんです。

定臣 普通の工場と訳が違ふらしいから、まあ文句は云へませんが、土地の人氣がどうも悪くなりさうだね。さもなくてさへ、百姓が田地を売ったがつてゐるんだから……。

兵頭 売りたいもんは売らしたらいいぢやありませんか。土地は桑と大根を作るものとしまつてはゐませんよ。

定臣 おほきに。だが、それは先生のお説ですか？ 生徒にもさういふ教へ方を、なすつてらつしやるんですか？

兵頭 子供には子供に云ふやうな云ひ方があります。（孝子が茶を汲んで出す）や、ありがたう。当節の子供は、不思議に物の考へ方が變つてきました。「これはかういふもの」では承知しない。理由が必要です。それも、こぢつけた理由なんかぢや、眼でうなづいて、鼻で笑つてゐる。教師もなかなか面倒になつてきました。

定臣 あなたなどは別でせうが、その先生にも、大体、信念といふものがなくなつてきた。わたしが小学校で歴史の講義を聴いた頃は、先生も、これで日本人を作らうつていふ熱と意気をもつてゐた。二宮尊徳の話をする時なんか、眼から涙をばたばた……。

兵頭 さういふ人は、今でもゐます。御心配には及びません。うちの校長も、その一人ですよ。生徒たちは面白がつてますが、ああいふのがいいんですかね。どうだい、お孝

いんだが、立派なことをしたから、その人間が好きだといふのは嘘だと思ふ。子供に納豆を売らせて、その上りを……。

この時、坂を上つて来る乗合自動車の音次第に近づく。

自動車が止ると、一斉に挙る少女たちの歓声。女学生 of 団体である。

男の教師　ここが有名な愛国峠です。遥か向うに見えるのが富士の霊峰……。　（少女た

ちの笑声）ここにあるのが、敷島の、綻び始めた山桜……。

少女A　朝日に匂つてゐるわ。

少女B　敷島の乙女心を人間はば……。

男の教師　黙つて！　皆さん、よくお聴きなさい。この峠に立つて、われわれが先づ感じるものはなんでせう。

少女C　冷たい風！

男の教師　ほかに？

少女D　爽やかな気分！

男の教師 まだほかに？

少女 A 自分のみすぼらしさ！

男の教師 もつと切実な感じ？

少女 B 喉の渇き！（少女たちの笑声）

男の教師 真面目に、真面目に！

女の教師 みなさん、察しがわるいのね。

少女 A わかった。浩然の気！

男の教師 大分近くなつた。それを現代の言葉で云ふと？

沈黙。

女の教師 駄目ね、みんな……。いいこと、あたしの口をごらんなさい……。

少女一同 ニ、ホ、ン、ジ、ン、ト、シ、テ、ノ、ホ、コ、リ……。

男の教師 よろしい。日本人としての矜り！ この大自然の美は、われわれの魂です。

祖先伝来の大和心を、今こそ、しみじみと感じなければなりません。そして、この比類

なき国に生れたことを、ひたすら、感謝しなければなりません。氣候温和、五穀豊饒、四海波穩かにして、人はみな勤勉であります。男子は勇猛果敢、女子は貞淑優雅、誠に人類の花、宇宙の宝である。宜なる哉、これを世界の樂園と呼び、不老不死の国と称するや。山河清くして偉人生るの譬へは偽りでない。われらはみな、英雄たり、烈婦たるの素質を恵まれてゐるのである。朝に富士を仰ぎ、夕に……夕に……その……近江の琵琶湖を伏し拝むわが同胞の精神力は、ロツキイ山、バイカル湖を友とする輩の比ではない。諸君、ここでひとつ、万歳を三唱しよう。日本帝国万歳！

少女一同　バンザアイ。

男の教師　バンザアイ。

少女一同　バンザアイ。

男の教師　バンバンザアイ。

少女一同　バンバンザアイ。

女の教師　愛国峠万歳！（少女たちの歓声）では、あたくしも、それでは、一言云はして貰ひませう。エヘン、今国守先生からたいへん有益なお話がありました、あたくしは、国語の教師として、みなさんに、ここで、和歌を一首づつ詠んでいただきたいと思

ひます。（少女たちの抗議的なざわめき）静かになさい。別に、点もつけませんし、成績に関係しませんから、極く自由に、即興的に、思つたことを三十一文字にまとめて下さい。

少女 A あたし、困るわ。

少女 B チエツ、そんなつもりぢやなかった。

少女 D こんなことなら、病気になるかとよかつたわ。

女の教師 なにもむづかしいことはないでせう。みなさんぐらゐの年になれば、そんな嗜みもなくちやいけません。普通教養のある女性なら、この風景を前にして、いやでも詩的感興が湧くべきです。椿さん、いかが？

少女 C ——愛国の峠に立てば……。

女の教師 それから……？

少女 C 今更に……。

女の教師 ふん。

少女 C 大和心を感じけるかも。

女の教師 ちつと散文的だが、まあよろしい。次は、どなた？ 杉さん！

少女 B まだ、上の句しかできませんの……。

女の教師 云つてごらんなさい。

少女 B 千早ふる……神の恵よ峠茶屋……。

女の教師 面白いですね。それから……？

少女 B 国を愛でよてふ……。

ある声 教へかしこし。

女の教師 だれです。後をつけたのは？（間）よろしい。もう少し叙景が欲しいですね。

橘さん！

少女 A 春浅き峠に咲ける山桜……。

女の教師 春浅き峠に咲ける山桜……なかなかよろしい。ふん。

少女 A 富士はおまけとわれは見にけり……（少女たちの歓声）

女の教師 おまけはどうですかね。実感ならしかたがありますまい。ちよつと、車掌さ

ん、時間はまだようござんすか？

女車掌 さあ、もうそろそろ出かけませんと、連絡に間に合いますかどうか……。

男の教師 ぢや、残念だが、ここはこれくらゐにして……。

少女D 先生のを伺ひたいわ。

声 賛成！

女の教師 先生は、そんなこと云つて、考へる暇なんかなかったわ。

声 ずるいの、ずるいの！

女の教師 さ、遅れると大変だから、みんな乗つて下さい。

男の教師 （はしやいで）乗車ア！

少女たちのざわめきに交つて、エンジンの動き出す音。

女車掌 （高らかに）オオライ。

車が走り出すと同時に、少女たちの合唱がはじまる。それが次第に遠ざかると、

定臣 やれやれ、賑やかなこつた。都のお嬢さんたちは元気がいい。——春浅き峠に咲ける——か。

兵頭 僕もそれをいつでも思ふんだが、なぜ田舎の少女たちは、ああ暗い顔をしてるのかねえ。お孝ちゃんなんか例外の方だ。

定臣 先生は、まだ、オオライぢやないんですか？

兵頭 オオライたあ、なんです。

定臣 ひやあ、英語ださうですよ。おや、あれやなんでせう。夫婦連れですぜ。乗合ができてから、ああいふのは珍しいな。おや、おまけに、女の方は洋服だ。大分、へこたれたとみえる、可哀想に……。この峠を、あの恰好で越えるのは無理だ。尤も近頃は、山登りつて奴もあるさうだが、あれや、まるで、散歩かなんかしてるやうだ。おい、お孝、座蒲団を出しときな。

兵頭 どれ、僕は、そろそろ、腰をあげよう。

峠までもう一息といふところで、旅の男女は、立止る。

男 おい、しつかりしろよ。今朝の勢はどうしたんだ。そこまで行けば、あとは下りだよ。

女 そんなことわかつてるわ。いつまでも登りつきりなんて山、話に聞かないわ。

男 口だけは達者でやがら……。おい、しやがんどまふなよ。人が来たぢやないか。

（話しかけるやうに）ちよつと伺ひます。そこが愛国峠つていふんですか。

兵頭 さうです。あの国旗の立つてるところがさうです。失礼ですが、どちらまでお出でですか？

男 いや、その峠へあがつたら、すぐ引つ返すんです。今朝、蓬萊町の宿を出て来たんですけれど、歩いてもぢきだつて云ふもんだから……。

兵頭 ああ、それぢや……。僕はまた、この峠をお越えになるんだと、大変だと思つて……。向うは山道を十里歩かないと、八島町へ着きませんから……。

女 その愛国峠つていふの、何があるんですの？

兵頭 なんにもありません。茶屋が一軒あるきりです。

女 景色がいいつていふだけなんでせう。

兵頭 まあ、さうです。

女 それごらんなさい。女中の話ぢやわからないなんて、自分で勝手にきめてるからをかしいわ。すばらしいお宮があつて、そのお宮に世界中の豚を集めてあるんだなんて出

鱈目なのね。

兵頭　だれがそんなことを云ひましたか？

女　いいえ、この人がですよ。なんでも、空想して、それを実際みたいに云ふ癖があるんですよ。瞞されて損しちやつた。

兵頭　はははは。瞞されでもしなければ、この坂道をお歩けにはなれなかつたでせう。

帰りはお楽です。では、ごゆつくり……。　（去る）

男　それぢや、ここから引つ返すかい。あそこまで行つてみる元気ない？

女　元氣はあつても興味が無いのよ。一人で行つて来るといいわ。

男　ぢや、君はそこで、地べたへ絵でも描いてたまへ。アナ嬉シ、悦バシ、戦ヒ勝チヌ
……。

女　（しくしく泣きだす）

男　ヒステリイはよしてくれよ。

女　ヒステリイぢやないわよ。足の趾ゆびが痛いよ。

男　どうすればいいんだい。

女　靴脱ぬがして……。

男 よしきた。かうかい。それから……？

女 あら、血が出てるわ。エーン、エーン……（泣く真似）

男 早くしろよ。

女 いぢつて見て！

男 そんなもん、いぢつたつてしようがない。靴擦れだよ、ただの。

女 ただでない靴擦れだつたら、どうする？

男 うるさいなあ。さあ、おぶされ。

女 靴、あんた持つて！

男 手は痛くないんだらう。

女 あたしに持たせるの？ ぢや、踵^{かかと}が口^{くち}中へはいつたつてしらないわよ。

男 ぢや、貸せ！ なんだ、軽いもんだ、こんなもん。

女 初めてみたいに云はないのよ。

男 殖生ノヤドーモ、ワーガーアヤアド。

（間）

定臣　驚いたお客だ。いらつしやい。どうかお休み下さい。愛国茶屋の渋茶を一杯、召上つて下さい。

孝子　いらつしやいませ。どうぞお敷き下さい。

女　まあ、好い景色なこと。

男　僕一人に見せるのは、勿体ないつてことがわかつたらう。

女　あたし一人だつたら、帰つてあなたになんてお話ししようかしら……。

男　形容なんかしなくたつて、君の眼つきで想像がつくよ。

定臣　おい、お孝、奥へ行つてろ。

女　ねえ、小父さん、どうして、この峠を愛国峠つて云ふの？

定臣　へへえ、それはでございます。第一に、この峠に立つて、あなたがたは先づなにごを感じになります。申すまでもなく、日本人の矜り！ この大自然の美は、われわれの魂です。祖先伝来の大和心を今こそしみじみとお感じになるでせう。四海波穩かにして、男子は勇猛果敢、女子は貞淑優雅、宜なる哉、山河清くして偉人生るの譬へ、あそこに見ゆるは富士の霊峰、ここ、咲き匂ふは国花山桜、嘗て清少納言も歌つてをります

——春浅き峠に、なんだつけ、……さやう、峠に咲ける山桜……富士はおまけとわれは見にけり……。おまけとはよく云つたもので、誠に、十二分の眺めで、来た甲斐があるどころではない。お土産にしてもなほ余りがあるといふ意味を、いみじくも詠まれたものと思ひます。

男　　もういいよ、小父さん。

定臣　へえ、別にお金はいただきません。これも御国のためでございます。

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集6」岩波書店

1991（平成3）年5月10日発行

底本の親本：「時・処・人」人文書院

1936（昭和11）年11月15日発行

初出：「文藝春秋 第十三年第二号」

1935（昭和10）年2月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：門田裕志

2011年5月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

富士はおまけ（ラヂオ・ドラマ）

岸田國士

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>